

平成二十三年

正月

喪に賀状親しくもあり親しくも無し

誰も来ず出もせず喪中の寝正月

千葉県旭市

雲かかり海辺にため息初日の出

明治神宮近く

破魔矢手に赤信号にじれてゐし

大倉山雑詠

遠富士や空に残月寒茜

蠟梅の寒を留めて咲き競ふ

三桮の産毛の光りて寒さかな

着膨れど脚寒からずや女学生

一月は三十一日間 晴れ

カラカラの空仰ぎ聞く雪の報

大寒の入り日箱根を滑り降り

大倉山梅園

年経たる早咲きの梅庭師撫づ

三分咲きの梅の大枝剪りくれし

節分

日輪の函嶺に入り節分会

豆撒きの子の声かすか高階に

春めく

柚子籠にどうぞと紙の貼りてあり

蒲公英の地に直に咲く日和かな

蒲公英の丈短きを避け歩む

裾野大野原

芝畑大霜に富士静もれり

殷々たる砲声凄し冬の富士

鋭利なる霜柱踏み富士を撮る

大倉山雜詠

自動ドア夜風もぬるき弥生かな

手袋の煩わしきを脱ぎ歩む

ぎしぎしの若芽かわいい日和かな

よもぎ草触るれば祖母の匂いして

沈丁花重き香漂う夜の雨

三月十一日 東北大震災

地震（なえ）の日に桂の丸き芽立ちかな

あつ蝶ちよ童女の笑みに未来見し

ガソリンを求（と）むる車列や花辛夷

大倉山雜詠

ねずの鞆割る雪白や花辛夷

ねず衣それぞれに脱ぐ辛夷花

雪柳五弁一重に先までも

四月

裾野山荘 アラジンブルーフレーム

灯油切れさてと思案の花祭り

鶴見川土手

若人の弾む息吹や夕桜

筥の少なき年と兄便り

五月

裾野山荘

ほととぎす啼く人里に富士かすみ

大倉山雜詠

木漏れ日の螢袋を灯しけり

透けゐれば舌にも脆し心太

天気図を見て異議のある梅雨入りかな

どくだみの群れ咲きをれば美しき

箱根（七月一日 箱根登山鉄道）

スイッチバック紫陽花電車行き戻る

信号場にあぢさゐ電車並び入る

梅雨明け十日

植木屋の腰に自前の蚊遣り香

植木屋の腰に蚊遣をいぶしけり

炎天に列なす先は餃子かな

荒れ畑やグラジオラスの朱の並び

電車より多摩川河原

暑きもの夏の河原の男ラクロス

新宿行きバス、渋谷駅前で発車待ち

バス冷房生殺与奪運転手

七月十日、富士学校公開に同好の志と

夏雲や蜥蜴の如き新戦車

炎天に早飯弁当友と喰い

夏雲や退役兵器鉄熱し

七月十二日 旧友一家 米国より一時帰国

横浜山手 すし処「侘助」

友と会ふ走りの小肌冷やし酒

親方の指に小肌涼やかに

歳月の消えてビズーの夏の宵

七月末、裾野山荘

紫陽花をどこから斬るやと電話問い

日の差して日の丸僅輝やきぬ

搔き曇り蛸の鳴く昼下がり

涼しさや早起き珈琲ミル回し

日の差して吹く風軽くなりにつけり

山手線

暑苦し隣で化粧の馬鹿女

夏休みしばし爪染む女学生

ゆりさん新盆、その後五十二号線を裾野山荘へ

生家には大きな竹藪あり

竹林の足許蠅螂斧構え

子蠅螂あるかなきかの斧構え

国道五十二号線

墨染の道端に立つ暑さかな

墨染のスクーターに乗る暑さかな

大倉山雑俳

新羽の大きなお寺

墨染の背ナに白花曼珠沙華

大倉山梅園

白萩の咲き初め戯むる犬二匹

鶴見川河原

ピント合う葛の花皆盛り過ぎ

ベランダ

丹沢の山壁見えて鰯雲

平成二十三年十月六日 三溪園吟行

緋に添うて肌の色した彼岸花

古塔に鳶の輪かかり秋の空

尾花垂れ猫覗き見る緋鯉かな

暴風の狼藉の跡破れ蓮

東国の最古の塔や秋の雲

蓮華院竹に名残の法師蟬

十月十四日 東京落語会

落語会はねて舗道に時雨跡

虎の門病院前の角地、虎の門精神科病院消える

虎ノ門角の更地の時雨かな

十月二十七日〜二十九日東北旅行

旅行前

紅葉狩り旅の旅程が届きおり

紅葉狩りアイテネラリー届きおり

仙台付近

地震に荒る道の波打ちななかまど

平泉

平泉いちやうを金と敷きつめて

破れ蓮平安の夢遙かなり

奥入瀬溪流

甘き香や桂落葉の吹き溜まり

奥入瀬グランドホテル

朝まだきオリオン眺む旅の宿

出合橋紅葉に一人農婦行き

八甲田山

目眩呼ぶバスに薙ぎ過ぐ枯木立

十一月二十二日立川談志逝く、二十四日公表、ニュース聞く。

『だんしがしんだ』

立川雲黒斎家元勝手居士

談志逝くを告げるラジオや夕時雨

寒さ見に沁む

熱爛を音立て啜る父に似て

人肌が好みと熱爛増やしゐる

からすみや心地熱めに酒の爛

大倉山雜詠

槻の大樹隙間の目立ち師走かな

十二月十日 皆既月食 昔の仲間と忘年会

蝕寒月友と酔歩の足の陰